

## 財団法人「古民家・白鳥岩尾屋保存会」趣意書

岐阜県郡上市白鳥町白鳥九六二番地にある「岩尾屋」は江戸時代から奥美濃一帯にさかんであった養蚕を基盤とする繭（まゆ）問屋、原（はら）家の屋号です。現在もかつての繭問屋の家屋の面影をかなりよく残しています。この伝統的民家建築を将来にわたって長く保存し、かつ地域の歴史を掘り起こす種々の文化活動の拠点として役立てようというのが、この財団設立の目的です。

### (A)財団の基本財産

- 1、岩尾屋の当主、原貴亮（はらよしあき）は岩尾屋の主屋部分の建物と土地及び若干の山林、また同家の所蔵する什器や骨董の一部を、本財団に寄付します。
- 2、当主の義兄にあたる水谷慶一は相当の金銭を財団に寄付します。
- 3、その他、この財団の趣旨に賛同した親族、知人、地元民らが賛助会員として参加し、別にとりきめる方法によって応分の金銭を寄付します。
- 4、以上を、本財団の基本財産とします。

### (B)財団の主な活動

- 1、古民家「岩尾屋」の保存と展示、ならびに見学者のための宿泊などの便宜を供与します。
- 2、財団の事業の具体例として次のようなことを考えています。
  - (1)年中行事・・・雑飾り、郡上踊りの参加、春秋の企画展の開催
  - (2)文化講座・・・特別に講師を招き、地域にふさわしい文化講座を開きます。（有料）
  - (3)岩尾屋サロン・・・当会で保存する什器を使って季節ごとの郷土料理のおもてなしをします。（有料、要予約）
  - (4)文化ツアー・・・貸切バスで白山と長良川周辺の歴史と文化をさぐる旅を、講師の解説つきで実施します。
- 3、地域の歴史を掘り起こすための附属の研究機関をつくります。

越前との国境に近い奥美濃地方は古くから日本海側との接点の位置を占め、長良川水系を通じて表日本と裏日本を結ぶ結節点の役割を果たしてきました。とくに江戸中期から明治期にかけて、この地域では養蚕がさかんにおこなわれ、繭の集荷や製糸にたずさわる商工人の活動が活発でした。（島崎藤村の『夜明け前』にもこうした美濃商人の活躍が描かれているほどです）彼らは広い地域から繭を集め、たがいのネットワークによって大量の生糸を横浜港から輸出して日本の外貨獲得に貢献しました。これが実は明治の文明開化の原動力となったので

あります。文明開化（鉄道、通信などのインフラ整備）を外国からの借款にたよらず「自前で」やりとげることで近代日本はアジアで例外的に欧米列強の植民地化を免れたのでありますが、それがこれら養蚕と生糸の生産・流通にたずさわった無数無名の人たちの努力の賜物であったことは申すまでもありません。

本財団は奥美濃およびその周辺における生糸生産と流通の実態と、それに従事した民衆の暮らしとを明らかにし、これらを広く地域住民の知的な共有財産とするために、

財団付属の研究機関、仮称「越美文化研究所」（略称エツミブンケン）を発足させ、生涯教育の一環として地域学習の拠点とします。

- 4、財団の保安林と長良川を中心にして、深い緑と清冽な水とに青少年が親しむための野外活動の場を提供し、ボランティアによる指導をおこないます。
- 5、上記の活動をひろく社会にPRするために諸々の出版事業を行います。
- 6、ライブ・ミュージアム(生きた博物館)コンセプトについて。  
この場合のライブとは音楽などというライブ、「録音でないナマの」という意味、つまり、生き生きしたとか、活動するという意味です。  
ライブ・ミュージアムは普通の博物館と違って、そこには実際に家族が生活します。また、たいていの古民家住宅のように屋敷内に道具をならべて、ただ見せるだけというのとも違い、これを拠点に地域住民といっしょになって、上記のさまざまな地域活動がおこなわれます。  
このふたつの点にライブ・ミュージアムの特色があります。

#### 7、賛助会員の募集について

上記の事業を維持運営してゆくために、以下のように賛助会員の募集をおこないます。（会員は財団の行う事業について種々の特典を受けるものとして）

正会員（個人） 年会費 1口につき 1万円（500口を目標）

特別会員（法人）年会費 1口につき 10万円（100口を目標）

（これには公益法人の認可が前提となります。その場合、寄付行為は税法上の優遇措置が受けられます）

- 8、財団には、その運営にあたる複数の理事、事務長及び職員をおくが、これらは原則として無給とします。

以上

財団設立準備室代表

千里金蘭大学名誉教授

水谷 慶一

<mailto:k-mizutani@kinran.ac.jp>